２０２２年３月６日　東日本大震災を覚える礼拝『苦難を乗り越える』　　高橋克樹牧師
聖書　エレミヤ書３１章２７～３４節、ヘブライ書２章１０～１８節

東日本大震災から今年で１１年の時間が経過しました。直接、大震災の被害に遭われた方々のその後の歩みが健やかであることを祈るばかりです。このような大震災が起こると、歴史的には神の存在が否定されたり、神の不在が唱えられたりしてきました。たとえば、１７５５年１１月１日にポルトガルのリスボンで推定Ｍ８・７の地震が起き、６万人が死亡した災害が起こりました。この大地震は神の存在と悪の存在とは両立するのか、また天災も神の摂理なのかという問いが神学的に突き付けた出来事となりました。当時のリスボンの人口が２７万人ですから、約２０％の方が亡くなったのです。理性の世紀といわれた１８世紀中葉のころのことですが、まだ神に対する素朴な信頼感は根強く、現実世界は神の意志のもとで完全に運行されていて、神は善良であると理解されていました。一方で人間の理性の象徴である哲学が盛んになった時期でもあります。哲学書のエチカで有名なスピノザやドイツの哲学者ライプニッツなどもこの時代の人物です。しかし、大災害が起こった１１月１日は諸聖人の日で、神に祝された日にそんな災害が起こったことに１８世紀の知識人は大きく動揺しました。一番困ったのは神学者です。なぜ、神に命を賭けて仕えた聖人を祝おうとする日に神の罰を受けなければならないのか！　そこでヴォルテールなどの啓蒙思想家は、神は善であり、慈悲深く、世界に対して最善で最良の意志を実現しているはずだという考えを痛烈に批判しました。彼だけでなくこの時代の多くの人間が最善をもたらすはずの神という存在自体が信じられなくなったのです。

ゲーテもこの地震に６歳で遭遇し、神の摂理や理性、神の善性が信じられなくなったと言っています。神はいったい何をしているのか。自然の災害に対して神は何もできないのかと、子どもながらに考えたと言っています。現代人も全く同じように考えてしまいます。悲惨な戦争が起こったり、東日本大震災のような大災害が起こると、必ず神の存在が疑われ、神の無力さが問題になります。大災害があったことで神が創造し良いとみなした世界が、実は理不尽な世界であることを証明していると考えてしまうからです。このことを別の言い方でいえば、理不尽なことがあると神が実在する「根拠」を失ったと人間は考えてしまうのです。

２０万部以上のベストセラーになった作文集「つなみ」を企画したジャーナリストの森健さんが、東日本大震災を生き延びた子どもたちのその後を追跡調査した「津波の子どもたち～作文に書かれなかった物語」（文春文庫）で、７つの家族の喪失と再生のドキュメントを書いています。

７つの家族のその後の再生の物語はどれも胸に迫るものですが、震災当時渡波（わたのは）小学校２年の鈴木智幸君の作文を読んでみたいと思います。「３月１１日５時間目の国語の時間に大きな地震がありました。その時泣いた子もいました。先生が大丈夫だよと言

っていました。おじいちゃんが迎えにきてくれました。僕とおじいちゃんとおばあちゃんとお兄ちゃんでサンファンに行こうとしたらお父さんは、会社に行くと言っていってしまいました。僕たちはサンファン（公営の観光施設）にいて僕がお腹が空いたと、と言っておじいちゃんがうちに行ってみるかと言って、行ったっけ電線が倒れててバックしてたっけ、津波が来ました。何とか間に合いました。そして、おばあちゃんがお寺でおにぎりを配っているみたいだよと行ってからずっと洞源院（どうげんいん）で泊まることにしました。３日目にやっとお母さんに会えました。４月１０日にお父さんが見つかり１週間後お父さんの火葬をしました。とても残念でした。洞源院はご飯も作ってくれるし、掃除もしてくれて、とてもいいところだと思いました。僕はお父さんに負けない選手になりたいです。」

鈴木智幸君は亡くなったお父さんの影響で少年野球をしている子です。お父さんは地元の高校でピッチャーでならし、大学も野球推薦で進み、その後は日産プリンスに入ってからは都市対抗野球大会にも出場するスポーツマンでした。智幸君が避難生活をした洞源院は曹洞宗の寺で震災直後から８月上旬まで避難所になっていました。この洞源院では非難生活を円滑に進めるために、『みんなで元気よく挨拶をしましょう』『履物を整え、常に整理・整頓、清潔に心がけましょう』『神仏を敬い、感謝の心を常に忘れないようにしましょう』など８つのルールを作り、物もない、電気も水もない、そういうなかで「自分が自分が」と言い出すと、収まりがなくなってしまう。でもお互いが助け合って、譲り合っていけばうまくいくと考えてルールを決めたそうです。そして、調理担当、救護担当、衛生担当、渉外担当などを決めて、避難生活者が自分の得意分野を担当して避難所生活を送ったそうです。洞源院の生活は午前５時１５分起床から始まって、６時にはおつとめでみんなでお経を読み、ラジオ体操の後朝食、と規則正しい生活を避難生活者が送っていたのですが、特にお寺らしいことは、住職が４月１日にはおつとめを再開したあとは、身体が悪い人をのぞいて、避難者の大半が読経にも参加したそうです。そのおつとめの際に、住職はその日葬儀が行われる人を紹介したのでした。毎朝、人の死に触れることで、逆に自分が生かされていることを実感することになったのです。智幸君も、このおつとめに参加する中で、成長したようです。父親の死がわかるまでは、どこか寂しそうな顔を見せることがあった智幸君でしたが、避難所生活の中で成長したと周囲の大人たちにはみられていた。７月に作文集「津波」を読んで取材に訪れたＴＢＳのカメラの前で、バッターボックスに立って元気な姿を見せた智幸くんは、取材の女性ディレクターから「お父さんからもらったもので、一番大切なものは何？」と質問を受けると、言いよどむことなく、「僕の宝物は、やっぱりお父さん自身ですね」と答えたのでした。震災から４カ月にして８歳の少年が思いっきり投げた直球のような一言だった。

この文庫本の解説で、聖路加の細谷亮太医師が書いています。「ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）から、ＰＴＧ(心的外傷後の成長)が言われるようになった。そのためには「困

難に負けず、しなやかに適応して生きのびる力」（レジリエンス）が働くとされる。人が人を支えることがいかに重要か、それによってレジリエンスの萌芽が見られることに、本書を読めば気づくはずだ」と言葉を寄せています。

ヘブライ人への手紙はキリスト教弾圧の中で書かれた書簡です。キリスト教の信仰を持つことで迫害を受け苦難を背負って生きていた信仰者にとって、信仰ゆえに迫害を受けることは苦難以外の何物でもない状況です。しかし、ヘブライ人への手紙の著者は言うのです。１８節で「イエス御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになる」と言ったのは、イエス自身が苦難を受けられたからこそ、人々の苦難を引き受けて十字架にかかられたことを示している言葉です。智幸君が「御父さんからもらったもので一番大切なものは？」との問いに、『僕の宝物は、やっぱりお父さん自身ですね』と、お父さん自身が今の自分を支えている力となっていることを言い表しています。私たちも、神さまからいただいたもので一番大切なものは？との問い、イエス様御自身ですと躊躇なく答えたいものです。それはイエスさまが今の自分を支える力になっているからです。